

## 東北地方太平洋沖地震に寄せて

日本マレーシア学会会長 宮崎恒二

2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震は未曾有の大災害をもたらしました。震災ならびに津波で亡くなられた方々のご冥福をお祈りいたします。また、被災された方々や被災地の皆さまには、心からお見舞い申し上げます。災害や避難所の状況に関する映像を目にするだけで心が痛みます。しかし、現地の方々の苦悩と悲しみはいかばかりかと思いを巡らさずにはられません。

マレーシアにも被害を及ぼした2004年12月26日のスマトラ沖地震と津波の折りには、膨大な数の犠牲者を生み出した津波の恐ろしさに打ちのめされましたが、同時に日本マレーシア学会の会員も積極的に関与したように、その復興支援活動の国際的な広がりにも大きな感銘を受けました。それから十年を経ずして同じようなことが日本でも起きようとは思っても見ませんでした。今回の災害に際しても、救助隊が各国から派遣され、救援物資や経済的な支援が海外から寄せられ、また、世界各地からのお見舞いのメールが個人に送られてくるなど、世界がつながり、相互に助け合うことのできる時代に生きているのだという思いを強くします。

会員の皆様におかれましても、この惨事を力強く乗り越え、またその経験を世界に伝え、生かしていく役割を担っていただきたいと願う次第です。

## 「ブーム」社会の行く末

多和田裕司(大阪市立大学)

春の訪れとともにまたいつものようにプロ野球のシーズンが始まろうとしている。根っからのタイガースファンとしてはチームの仕上がり具合が気になって、仕事が溜まっているにもかかわらず、ついついスポーツニュースに見入ってしまうのだが、悲しいかな今年はタイガースの情報が流れる度合いがかなり少ないように感じられる。原因は「佑ちゃん」である。どのチャンネルでも早稲田大学から北海道日本ハムファイターズに入団した一年生投手の動向がまず報じられる。「佑ちゃん入寮」「佑ちゃん北海道上陸」・・・そしてそれを追っかけるオバサマたち。野球よりも「佑ちゃん」がニュースなのである。プロ野球はいま「佑ちゃんブーム」なのだ。

考えてみれば、日本ではずっとなにかの「ブーム」が続いている。日本中がスプーンを握りしめた超能力ブーム、たけしや紳助がテレビで毎日しゃべりまくっていた漫才ブーム、最近の韓流や多摩川に流れ着いたアザラシまで、ありとあらゆるところにブームなるものが沸き起こる。おそらくコンパでの一気飲みや街で目にする行列なども、みんなで同じ行為・行動をとるという意味においてはブームと通底するものであろう。

翻ってマレーシアにはブームがない。マレーシアに関心を持つようになって30年近くになるが、いまだに「これがいまブームだ」というものに出会った記憶がない。安易な比較文化論は慎まなければならない

ないが、過去 20 年の日本とマレーシアを比べたときに、日本には数々のブームがあったのにたいして、マレーシアにはブームと呼べるようなものはなかったというのは、おそらく間違いないのではなかろうか。自分とは逆の立場の、日本のことをよく知るマレーシア人に聞いても、たしかにその通りだという。

理由はいくつか思いつく。たとえばブームの支え手としての人口の多寡、ブームに費やすことのできる経済的余裕の有無、ブームを仕掛けるマスメディアの規模や影響力の相違などなど。そしてなによりも大きな要因は、日本が言語、文化、宗教(無宗教)などにおいて世界でも例外的に同質的な社会であるのにたいして、マレーシアはまったく逆に例外的に多様な社会であるという点であろう。人々の背景が多様であるがゆえに、マレーシアではたとえば昨年末のスズキ・カップにおけるような一瞬のお祭り騒ぎは生まれても、それはブームになる前に終わってしまう。

もちろんブームのある社会とない社会ではどちらがよいかという話ではない。どちらの社会も地理的、歴史的な与件のなかでの出来事の累積によっていまの姿があるにすぎない。ただ、なにかよく訳もわからない間に、そして何も考えずに、みんながみんなひとつのことに熱狂する状況に身をおくことに、ある種の嫌悪感や多少の気味悪さを見いだしてしまう自分にとっては、ひとりひとりがバラバラで違う方向を向いているマレーシアのような社会のほうにこそ居心地の良さが感じられてしまう。

よそ者のこのような身勝手な思いは、たぶんマレーシアの人からは相手にはされないであろう。多様性にともなうマイナス面が文字通りそこに暮らす人々の生存を賭けた国家的アポリアとして存在してきた社会にたいして、多様性の魅力についてのナイーブな賞賛が「お気楽な」他者理解にしか過ぎないものであることは十分承知している。

しかし、である。同質的な社会と多様な社会というふたつの社会の間に優劣はつけられないとしても、具体的なある社会が、自らがおかれた条件のなかで今後どちらの方向を目指すべきかという議論は、十分に可能であろう。資源や食料に乏しく、加速化するグローバル化のなかで人材の創造性が生み出す独創的な価値のみに頼らざるを得ない日本社会にとっては、いうまでもなく同質的な社会から多様な社会への転換が必要とされるはずである。そこではマレーシアが経験したような、言語や文化や宗教の違いによる摩擦や対立が生じるかもしれない。しかしそれを越えてなお多様な個のぶつかりあいによる創造の道を目指すべきだと思う。

最後に、数年前に出版されたある本のなかで、社会学者の見田宗介が日本人の心性の現れとして取り上げた短歌を紹介して稿を閉じたい。自分にはその歌が、ブームが繰り返される社会の末路を暗示しているように感じられてならない。

「轟めきて海に墜ちゆくペンギンの仲良しということの無惨さ」(見田宗介『社会学入門』(岩波新書) 98 頁より抜粋)

【この巻頭言は 2011 年 3 月 9 日にご寄稿いただきました。3 月 11 日以前の状況をもとに書かれていますが、その内容は現在の状況においてもいっそう重要なメッセージであると考え、加筆・修正なしで掲載させていただきました。(編集部)】